

主日礼拝説教「神になるより人になれ」

日本基督教団石神井教会 2019年11月3日聖徒の日

【旧約聖書日課】創世記 3章1～15節

1主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

2女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の実果を食べてもよいのです。3でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

4蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。5それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

6女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

8その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

10彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

11神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

12アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

13主なる神は女に向かって言われた。

「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

14主なる神は、蛇に向かって言われた。

「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。

お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。

15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に

わたしは敵意を置く。

彼はお前の頭を砕き

お前は彼のかかとを砕く。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 7章7～13節

7では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が「むさぼるな」と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。8ところが、罪は掟によって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内に起こしました。律法がなければ罪は罪でないのです。9わたしは、かつては律法とかがわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、10わたしは死にました。そして、命をもたらすはずの掟が、死に導くものであることが分かりました。11罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまっただけです。12こういうわけで、律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。13それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしただけです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのです。

「決して死ぬことはない」

今日、礼拝堂に入ってこられた皆さんは、入り口に「鐘」が置かれていることにお気づきだったと思います。木枠の台座に固定された「鐘」です。先週月曜日に地上での生涯を終えられ、今日と明日、この礼拝堂で葬りの式を執り行うことになっている姉妹が生前、「どうしても最後に教会に鐘を寄贈したい」とご家族と相談されていたのです。しばらく前から、わたしどものところにも願いが伝えられ、相談を続けていたところでしたが、入院中であった K 姉のご容態が芳しくない中、ご子息が奔走されました。先週末に「鐘」の本体が取り寄せられ、昨日、仮の台座をご子息自作で完成させていただきました。今日と明日の葬りの式には、K 姉と共に、この礼拝堂に迎えることになるでしょう。

教会に「鐘」が新たに設けられることは、最近では少なくなりました。特に都市部の教会では、「鐘」を鳴らすことが、周囲の住人からの苦情で、難しくなっているからです。それは、日本のようにキリスト教会が少数派の社会だけでなく、伝統的なキリスト教社会でも問題になっていることのように、何百年も時を告げ続けてきた教会の「鐘」の音が迷惑だと裁判に訴えられるようなことも、決して珍しくはないようです。それでもなお、「鐘」が教会の営みを告げる音として、その地域に生きる人々の祈りを導き続けていることも、確かなようです。イタリア在住の日本人が書いたエッセイの中で、葬儀に際して鳴らされる「鐘」と共に町中の多くの人々が、たとえ親しい間柄ではなかったとしても、亡き人を見送りに教会に集まって来る様子が描かれているのを、読んだことがあります。

「鐘」が鳴らされようが、鳴らされまいが、わたしたちは、一人の人の死を悼み、神のみがお与えくださる確かな慰めを求めつつ、葬送の祈りへと集まって来る者です。「死」の現実には、さまざまです。残された者に大きな心の痛手を与える「死」もあれば、平安のうちに受け入れることのできる「死」もあります。どのような「死」として立ち現われるか分からずとも、わたしたちは、いつか自分自身の「死」のときを迎えるまでに、多くの周囲の者の「死」の現実と立ち会わなければいけないでしょう。そして、そのような現実に対して、わたしたちは、教会という営みの中で共に、向き合おうとしているのです。

教会暦は、今日が「聖徒の日」の主日です。多くの教会が、死者を記念する礼拝を営まれていることでしょう。わたしたちの教会は、すでに先月中旬に、記念の礼拝をいたしました。そのような記念の礼拝を毎年続けるのは、わたしたちが、「死」の現実をただ嘆き悲しむだけではないからです。わたしたちにすでに与えられている希望を確かめるために、わたしたちは、死者を記念し続けるのです。主イエスの御言葉を思い起こすのです。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」(ヨハネ 11:25~26)。

「決して死ぬことはない」のです。「死んでも生きる」のです。それは、主イエスの告げてくださった神の御心なのです。わたしたちが死んだままで良いわけがない、と神が願ってくださっているのだと、主はおっしゃられたのです。

「死んではいけないから」

今日はしかし、「決して死ぬことはない」と、蛇が語っているのです。

旧約日課（創世記 3 章）は、神に造られた男と女が、蛇に言いくるめられて、「決して食べてはならない」（創 2:17）と神から命じられていた木から実を取って食べてしまった物語が語られていました。「墮罪物語」という呼び方で知られている箇所です。蛇は、女に対して、神が言われたことは何だったのかと、問いかけました。女はそれに答えて、神がおっしゃられたことはこうだと、応じています。「…**食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました**」。

「決して食べてはならない」と命じられた神は、「食べると必ず死ぬ」と続けられているだけでした。けれども、女は、その神の言葉の真意は、「人が死んではいけない」ということだと理解していたのです。神の言葉を額面どおりに聞いたのではなく、彼女は、お語りくださった言葉の背後にある神の真意を聴き取ろうとしていた、と言ってもよいでしょう。

蛇の語る言葉も、ある意味では同様かもしれません。「決して死ぬことはない」というのが神の御心であるはずだと、この世で最も賢いものとして造られた蛇は、理解していたのです。それは、間違いではありませんでした。主イエスがお語りくださったように、神の御心は、わたしたちが決して死ぬことがないようにと願ってくださっているのです。にもかかわらず、蛇の口にした言葉は、何と違う響きをわたしたちに与えるのでしょうか。

皆さんには、主イエスが「決して死ぬことはない」とおっしゃられた場面を、思い起こしていただけることでしょうか（ヨハネ 11 章）。主イエスはそのとき、愛する友人ラザロの死という現実を前に、その姉妹たちと向き合われていたのです。ラザロが死んですでに四日が経っていました。その遺体は、もはや墓の中に葬られていました。ラザロは、まだ若かったはずですが、その「死」の現実を前にして、家族も周囲の者も皆、喪失感、無力感に襲われていたのではないのでしょうか。そのような中で告げられた「決して死ぬことはない」という主イエスの言葉は、それを聞いた者に力強く響いたというよりは、むしろ、空しく虚ろな言葉として受けとめられたかもしれません。それでも、その言葉は、弟子たちによって伝えられることになりました。あれがラザロの「死」という現実を乗り越えさせる御言葉になったと、後になって弟子たちは思い起こしたのでしょうか。確かに、弟子たちは、そのときラザロが墓から出て来てよみがえったと、死は乗り越えられたと、証言するようになったのです。

女の前で神の御心を語った蛇には、「死」の現実が見えていなかったのだろうと思えてなりません。「死」の現実が見えていないからこそ、「決して死ぬことはない」という神の御心も、ただ自分に都合よく、自分の安全が守られているという意味でしか、受けとめられなかったのです。蛇は、神のことを良く知っていたのかもしれませんが、知っているつもりだったかもしれません。けれども、本当に知らなければいけないこと、神が御心を向ける現実を、知りませんでした。

「どこにいるのか」

この季節に、わたしは自分が20歳のときに経験した友の死を思い起こします。ちょうど30年前の10月の末でした。日曜日の午後、教会の青年たち20人ほどで、都内の公園に遊びに行きました。その中に、彼もいました。けれども、翌日曜日には、彼は教会にいませんでした。月曜日の朝、自室で病死しているのを、ご家族が見つけれられたのです。専門学校を卒業した後、家業の花屋を手伝いながら、いつも教会に出入りしている、教会大好き青年でした。その彼の死は、わたしにとっては、祖父母の死よりも重い「死」の現実でした。けれども、その「死」は、確かに今のわたしの立ち位置を方向づけるものとなったのです。彼が、生前、神学校に行くことを願っていたと聞かされたのは、6年後、わたし自身が神学校に進む決意を牧師に話しに行ったときのことでした。

その彼のことを思い起こすたびに、わたしは、自分が29歳のときに経験したもう一人の友の死のことも、思い起こすのです。わたしは、すでに神学生でした。彼は、会社勤めをしていましたが、教会が大好きな青年で、仕事がどんなに忙しくても、教会の礼拝や行事を欠かすことはなかったのです。その彼は、クリスマス前の朝、過労で倒れ、年明けに息を引き取ったのです。彼もまた神学校に進むことを願って相談していたと聞かされたのは、葬儀で久しぶりに母教会に行ったときのことでした。

正直に申しますと、彼ら二人のことを、わたしは、いつも小馬鹿にしていたのです。教会が大好きなのは分かるけれども、あまりに教会べったりで、学業や仕事に支障が出るような生活をしていると思っていました。もっと賢く、適度に教会と関わればよいのに、それができないのは愚かなことだと見ていました。それこそ、神のように知識を得て、教会でもこの世でも賢くあることを良しとし、自分の人生の目標にもしていたのです。けれども、わたしは、彼ら二人の死を通して、そのような生き方から引き離されたのです。「誰よりも賢い」とみなされるよりも、彼らのように、彼らが願ったように、教会に留まり、教会の働きに徹することに、わたしの生き方は方向転換させられたのです。彼ら二人の死がなければ、わたしは、きっと今ここには立っていませんでした。

「決して死ぬことはない」と、神は、わたしたちに願ってくださっています。しかし、神は、わたしたちに問われるのです。「あなたは、どこにいるのか」と。この世にあって、間違いなく「死」に向かって歩んでいるあなたは、どこに立つのか。どこに立って、その命を生きるのか。どこに立てば、あなたの命は、死んでも生きるのか。そう、神は、わたしたちに問い続けられているのです。

そのとき、かつてのわたしであったならば、自分の何も持たない姿を恥じて、神の前から身を隠したかもしれません。今は、このままの自分の姿を、恥じることなく神の御前に露わにしてよいと、知っています。主イエスが、「死んでも生きる」と言ってくくださったからです。すべてを失っても、「決して死ぬことはない」と約束してくくださったからです。わたしたちは皆、そのような者として、裸の、死と隣り合わせの現実にいる者として、神の御前に立つのです。